

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十六年四月二十八日運輸省特別授承認可第三五二號
昭和二十六年五月廿五日印刷
昭和二十六年六月一日發行

浄土

第十七卷 第六號

六月號

三光鳥の鳴くころ

吉田絃二郎

渡邊海旭

知切光歳

稿遺賽錢放談

藤田寛雅

藤田寛雅追悼

1951

6

秘寶開顯

先月下旬、三越で伊勢神宮文化展なるものが開かれた。私はこれを都電の廣告で知った。そのポスターには「千古の秘寶ここに公開さる。日本文化史上の大偉観」といつた意味の文句が神域の松の稍越しに、千木高くそびえる神殿の姿の上に畫かれてあつた。

佛教では古來、秘佛秘寶の御開帳が時に行われ、それを機會に全國の善男善女が雲集した。これは一つの立派な宗教行事であり、信仰を深めるよすがともなつて來た。あくまでも敬虔な心を以つて拜觀するところに、秘寶開帳の意味がある。

合理主義の時代、科學萬能の現在、あたは文化的價值あるものを徒らに秘めておくことは許るされぬ。だが、さればとて何でもかまわずにこれを白日に曝らし、所謂科學のメスなるものを無殘に加えることが、無條件に許るさるべきではない。

宗教にはいふべからざる神秘がある。これをへめぐりとつて赤裸にしたからといつて、信仰は逆に冷却してしまふ。ましてこれを萬人衆觀の曝し物にして、經營の足しにしようなどとは誠に悲しむべき營利主義といわざるを得ない。(竹中)

目次

芝園だより……………表

紙(三)

渡邊海旭(一)……………知切光 歳(20)

新佛教道德(二)……………佐藤賢順(4)

三光鳥の鳴くころ……………吉田絃二郎(1)

遺稿 賽錢放談……………藤田寛雅(16)

弔 辭……………高柳光壽(8)	一 藤田寛雅追悼
藤田寛雅君……………眞野正順(10)	私心の無い人……………佐藤賢順(9)
町のホープ消ゆ……………馬場秀夫(13)	二人の遺兒……………佐藤密雄(14)
追 悼……………佐藤治子(17)	



三光鳥の鳴くころ

吉 田 絃 二 郎

今年は幾年振りかで庭の樺に來て黎明から三光鳥が鳴いてゐる。妻が死んだころよく佛間に近く三光鳥が啼いたので、あの日から三光鳥の聲を聴くに耐へない氣がしてゐた。ところが戦さのところ薪をこしらへるために樺の枝を卸してしまつたら、この數年一度も三光鳥は鳴かなくなつた。最初のころは初夏になつても三光鳥が鳴かないので救はれたやうな氣がしてゐたが、二年三年と經つ間には三光鳥の聲をしのぶ心にもなることがあつた。今年には切られた枝も伸び、新芽も繁つて來たので、朝早くから樺に飛んで來てすがすがしい鳴き方をしてゐる。その美しい聲を聴くごとに、あのころのことを思ひ出して胸にこたへるものがあるが、それでもやつぱり三光鳥が歸つて來てくれてよかつたと思ふ。芭蕉の

「愁に住するものは愁をあるじとし

徒然に住するものはつれづれを主とす」といふ詞を思ひ出す。

わたくしはかつて菊を作る老人に聞いたことがある。眞に菊の見ごろといふのはたゞ一日だけであるといふ。さうすれば菊を作る人はたゞ一日の菊を観るために一年三百六十五日を土にまみれて精根を盡すといふわけである。

この菊作りのひたむきな態度は、臨終の正念を目がけて一生涯を念佛にさゝげて行つた尊い聖者たちの生活を想はせる。

わたくしはこのごろ自分の臨終の姿について時々想像することがある。もし幸ひにして静かな臨終を遂げることができたとして、わたくしは唇に微笑を泛かべるであらうか？ 或ひは泣くであらうか？ わたくしは恐らく

涙を浮かべるであらうと思ふ。

九十年の孤獨な生涯を送つたミケランゼロは「眠ることとはうれしい。しかし石となることはさらにうれしい」といつた。だが、それほど人生を苦しみ、死を冀うたミケランゼロにしても死の刹那には涙を流したであらう。この現世を穢土といふ。なるほど考へやうによつては穢土であり、濁世である。しかしこの現世こそ、わたくしたちが過去、現在を通じて持ち得た唯一つの實感であり、生命である。

わたくしたちは現世に於いて人の世の醜さを知つた。だがわたくしたちは同時に母の愛の深さを知り、夫婦の情の切なさを知り、友情の温かさを知つた。死はこれ等の人々から永遠に離れてわたくしたちを旅立たせる。臨終に涙を浮かべるのは自然なことであらう。

今朝深い淡紅の牡丹二輪を携へて來た人があつた。去年も牡丹のところにわたくしを訪ねてくれた紫紅園の山中氏である。氏は「花の観音」の御影を牡丹の上に載せて語り出した。

「今度花の観音さまを花の丘に安置し奉り、萬花の守護をお願いいたし、それとともに美しい花の光の心を世の中の人々の心の裡に植ゑ付けようと思ふのです」と。

御影を拜するに端嚴美妙な観音菩薩のお姿に、花神のあでやかさとふくよかさをたゞへた親しさを感じさせるものがあり、まことにありがたいお姿である。

「いつたい花といふもの、草木といふものもすべて魂を持つてゐますよ。たとへば朝になつて牡丹が花を開き、夕になれば花瓣を閉ぢるのは種子を保護するためなのです。雨の日は雨から種子を保護せんがために花瓣を巧みに重ねて閉ぢるのです。そして種子が保護を要せないほど完全に發育した時はじめて花は散るのです。」

それから花は決して血族結婚をいたしません。同一の花辨に包まれた雄蕊と雌蕊は結びつきません。必ず昆蟲なり風なりに依つてはこばれて結びつくものです。」

園主の話はかつてわたくしが植物について経験した記憶を呼び起こした。わたくしは戦時中、裏の畑につるいんげんを播いた。やがていんげんは一本の長い竹竿にからみついた。竿のいたゞきまで達すると、さらにつるを伸ばすのであるが、わたくしは試みに四方遠近に新たに竿を立てた。するとつるは必ず最も近い位置にある竹の方向を選んでつるを伸ばして行つた。それはあたかもつるの先端に眼を持つてゐるかのやうであつた。多くの人々は花木は無心であると信じてゐる。しかし花も草も木も生きてゐる。心のはたらきを持つてゐる。時としては

人間以上の叡智を持つてゐる。人間以上の愛情をさへ持つてゐる。

學校の子供たちは植物學の教材として花を切つて學校に携へる。そして授業がすめば何の未練もなく捨てる。教師たちはせめて子供たちに花に對する回向の念を教へ込むべきである。

毎年早苗取るころになれば子供たちは田圃に来て蛙を捕へ、赤むきにして學校へかへる。動物學の教材にするのであらうが、教師たちは捕へられた蛙に對して一片の供養心を發したであらうか。人間の子に生きて保護せらるゝ權利があれば、花にも蛙にも同じことがいへる。

わたくしの庭の竹のしげみにいつも二番ひの小綬鶏がやつて來た。小綬鶏は雉子的一種で鶉よりやゝ大きな鳥である。その二番ひの小綬鶏の内一羽の雌が獵夫に撃たれたため、今では夫婦の小綬鶏と、男やもめになつた鳥と三羽だけが毎日わたくしの庭にやつて來る。わたくしは硝子窓越しに三羽の鳥をながめてゐると、雄鳥が蟲をくはへては雌鳥に喰べさしてゐる。ところで男やもめの鳥が近づいてゆくと猛烈ないきほひで追つかけてゐることがある。自然このころでは男やもめの鳥は自分ひとりで竹林の中を歩いてゐることが多い。雨の日の夕暮れなど、寂然として竹林をあさつてゐる孤獨の小綬鶏を見ればあはれである。

投稿規定

本誌が讀者の皆様各自のものであることは申すまでもなく、お陰けで近來は色々と親味の御愛顧が頂けるようになりました。就きましては、投稿の規定を一應左の如くに定めました故、何とぞよろしくお願い申し上げます。

一、内容 信仰實話、體驗談、處世訓、時評、和歌俳句その他

一、長さ 四百字詰三枚以内。但し、特別の場合には御相談に應じます。

一、選擇 採否及び掲載の順序は編集部に一任のこと。尙投稿原稿は採否に拘らず御返却は致しません。

一、締切 毎月三日迄。

一、宛先 東京都港区芝公園五の十

法然上人續仰會編集部

右に準じてどしどし御投稿下さいますようお願い申し上げます。

新佛教道德（戒律への反省）（二）

純 潔 と 勤 勞

佐 藤 賢 順

この前に現代の社會生活へ生かすべき佛教の實踐道德として、無私・慈愛・純潔・勤勞・和合の五つを挙げましたが、續いてその一つ一つをお話します。

無私は佛教の道德の最も根本となる原理で、すべて行いはこの心持から爲されなければならないのであつて、古くから無我といわれてきたことであります。しかし無我といわず、故らに無私といふましたのは、無我は「諸法無我」（どの存在にも永く變らない實體はない）というときの無我であつて、人と物との兩方に通じて大變廣い意味に使われるのが普通でありますから、特に道德的行爲の主體であるこの私の無我を現わすために、無私という表わし方をしたのであります。私心わたくしごころがないという意味にとつてもよいでしょう。

佛教の實踐的原理は、法句經の「諸の惡は作すこと莫なれ諸の善は奉行せよ。自らその意こころを淨きよくす、是れ諸佛の教えなり」という聖句のうちに示されているということを、前回お話しましたが、この第三句の「自らその意を淨くす」というのは、正ただしく無私でありまして、貪りの心、私本意の心、自らの欲望を滿たそうとする心を取り除いて、心を淨めたことで、無我になり無心になつたことであります。この聖句の意味は、惡を止め善を行うにはまず私心を離れなければならぬ、ということですから、無私が正しい生活の根本となることを示しているのであります。

ところで序ながら申しておきますが、この無私はいかにしたら得られるかといふますと、それは智慧によるのであります。自分のほんとうの姿、ほんとうの在り方を、ある

がまゝに反省して、自分というものはないと知ることと智慧というのです。それは釋尊が繰り返えしお説きになつたことですが、別の話題になりますから、今は略します。

次に慈愛。慈愛とはすべてを包み生かそうとする大きな愛です。個人主義的な愛のように、何もかも自分の方へ取り込んで、自分の周りに集めて、自分を太らせようとする愛、欲食りの愛ではありません。かつて有島武郎氏は宗教の立場に別れを告げて、近代個人主義に徹底しようとして「惜しみなく愛は奪う」と言いました。そして「私は私自身を何物にも代え難く愛することから始めねばならない」という所から出發して、愛は與えることではなくて奪うことであり、投げ出すことではなくて吸い寄せることであると言いました。「私が他を愛している場合も、本質的に云えば他を愛することにおいて、己を愛している」のだということです。こういう愛は他人を生かし幸せにするのではなくて逆に自分のために他人を犠牲にし搾取し利用するだけであります。

これに反して佛教の慈愛は無私に裏づけられていますから、私を太らせることから始めるのではなく、反對に私を無くすることから始めるのです。従つてそれはいわゆる與えて取る（ギブ・アンド・テーク）というような駆引きでは

なくて、與えつばなしであります。この愛は私心がありませんから、誰れ彼れの區別なしに、公正に平等に、注がれます。さて無私と慈愛との二つは、裏表一體となつて、生活へ働きかけますが、まず手近な所から家庭生活においてどう現れるかを見ましょう。

そこで第三に純潔。純潔は五戒の一つである不邪淫を今の言葉に言い換えたのですが、しかしたゞそれだけではありません。もつと積極的な意味を持っています。現今では家庭は社會と個人を結ぶ單位として、缺く可からざる存在となつていまして、これを無視して社會を語ることはできないのですが、古い佛教は實はまだこの家庭の問題を解決してはいないのであります。佛教の戒律が教えるところは絶対の禁欲ですから、そのようなことが現今の家庭に受け入れられないことは申すまでもありません。

現代の聖者ガンジー翁も、家庭道德の基準としてブラフマチャリヤ（淨らかな行い、すなわち純潔）を説いていますが、これもまた絶対の性欲否定でありまして、夫婦が兄の如く妹の如く生きることによつて、愛情は一層深まるといふのであります。が然し、前回にも述べましたように、印度文化と民主主義文化との間には、可成りの隔りがありまして、こういう禁欲主義が直ちに現代の家庭生活に受け

入れられるとは思われません。ですから純潔はむしろ積極的に一夫一婦の徹底による家庭生活の純化であり、お互が氣儘を抑えて深い慈愛を家の隅々にまで行き届かせることでありたいと思います。

次に第四に勤勞。私なきことは社會生活において、特に經濟生活の方面では、勤勞として現われてきます。これは古い言葉の精進（倦まず弛まず努めること）を言い換えたものですし、廣い意味では不偷盜（盗みをしないこと）もこのうちに含まれます。自分は安逸を貪つて少しも働かずたゞ他人の生産したものを消費しているのは、廣い意味の盗みであります。大切なのは、如何に使うかということではなくて如何に生み出すかということです。過去の佛教は消費の方面については、無駄にするな、必要以上に使うなと懇切丁寧に教えています。例えば次のような物語が傳えられています。釋尊の世に在りました頃の話ですが、憍賞彌國の優頭王の妃サーマヴァティは、或る時、釋尊の弟子の阿難に五百枚の衣を贈りました。ウデーナ王はこれに驚き且つ怪しんで、アーナンダに訊ねました。

「大徳よ、そのように多くの衣をどうなさるのですか。」

「大王よ、衣の破れた比丘達に分けてやります。」

「ではその破れた衣はどんなさるのか。」

「破れた衣で敷物を作ります。」

「では古い敷物は？」

「それで枕の囊を作ります。」

「では古い枕の囊は？」

「それで足袋を作ります。」

「では古い足袋は？」

「雑巾にいたします。」

「古い雑巾は？」

「大王よ、私どもはその古い雑巾を切りこまざいて、泥と混ぜて、壁に塗り込みます。」

この物語は物に對する佛教徒の敬虔な態度を示しているもので、物欲を離れた感謝のうちに、つましい消費生活が営まれるべきであることを語っていますが、生産のことについては少しも觸れてはおりません。現在の社會にあつては生産のための勤勞は等しく何人にも負わされた責任でありまして、からだを使う勞働であろうと、頭を働かせる仕事であろうと、何人も一定の勤勞に従わなければなりません。勤勞する者だけが消費に價するのであります。古い經典には次のような記録があります。

世間が跋耆の地方に居られたとき、比丘達と毘舍離で安居に入られました。（安居というのは雨の多い三ヶ月の間を

一定の場所に籠つて修行することです。世尊と離れた他の一群の比丘達も婆耆(ヴァツグムダー)河畔で安居に入りました。その年はヴァツチ地方はひどい飢饉で、餓死する者が續出する有様でしたから、安居に入つても信者の施しを受けて暮してゆくことは容易ではありませんでした。そこでヴァツグムダー河畔に安居した一群の比丘達は一策を案じて、信者達に向つて自分達お互を讃め合つて、この比丘達は阿羅漢である、修行の進んだ尊い人達である、世の人の供養を受けるに價する者である、と宣傳しました。すると世間の人々はそれほどの比丘ならば自分達の食を割いてでも修行を助けてあげようと、施しをしましたから、比丘達は無事に安居を終えることができました。彼等は顔の色艶もよくからだも太つて、世尊の居たもうた毘舍離へ行きました。世尊を中心とする一團も安居を終えました。これは法の如く修行をしていましたから、食べる物としては殆んど取らず、顔は青さめからだは瘦せ衰えていました。

色艶のよい太つた比丘達の姿を怪しまれた世尊は、彼等が世を欺いて食を求めたことをお聞きになつて、いたくこれを歎かれ鋭く叱責されて、「阿羅漢でない者が偽つて阿羅漢と稱し、世の中の食べ物を盗むことは賊中の大賊である」と言われました。不妄語戒(偽りを言つてはならない)という戒めは、こうして定められました。阿羅漢とは應供

すなわち受けるに價する者という意味であります。勤勞せずして消費する者は受けるに價しない者であります。しかも佛教の教える勤勞は私利私欲を満たすための勤勞でなく利己心を去つて社會の幸福のために奉仕する勤勞であります。

第五に和合。佛教の信仰にはいるのは、佛法僧の三寶に歸依することに始まるのですが、この僧とは僧伽すなわち和合でありまして、平和な社會は佛教の初めから目指す目的であります。和合を破ることは五逆罪の一つに數えられたほどであります。和合は無私の最も具體的な現れであつて、私心があり黨派心がある間は、互に奪い合う鬭争が續くだけで、決して平和な社會は實現されません。しかし和合といつても、腐つた水が流れずに溜つていゝような沈滞ではなく、清澄な水が満々と湛えていゝる静けさであります。妥協や馴れ合いでなく勇氣と正義を包んだ和合であります。政治生活はかくありたいと念するのであります。これまで述べましたように、無私・慈愛・純潔・勤勞・和合の五つを以つて、新しい道德の原理として、實踐生活を律してゆきたいと考えるのであります。

藤 田 寛 雅 氏 追 悼

弔 辭

高 柳 光 壽

大正大學助教授藤田寛雅君の靈に申し上げます。君は本月五日不慮にして長逝されました。まことに追悼に堪へません。

君は昭和五年四月東京帝國大學文學部國史科に入學せられ八年三月卒業後も引續いて同學大學院にあつて日本史の研究に専念從事されました。そして九年五月鹿児島縣立第二鹿児島中學校の教諭に任ぜられ同縣史編纂事務をも囑託せられましたが十三年三月辭して上京し翌十四年四月大正大學講師となり史學科の講義を分擔されることになりました。かくて十九年四月には同學助教授となり引續いて日本史の講義をせられ以て長逝の日に及んだのでありました。そしてこの間或は明治大學に或は東洋大學に教鞭をとられ、また文部省教科書執筆委員となられたこともありましたが、私どもと尤も深い關係に立たれたのは廿一年四月から翌廿二年六月まで大正大學史學

研究室副主任であられたことでもあります。

君が東京大學に於ける卒業論文は淨土宗創立以前の淨土思想發達に關する研究と聞いておりますが爾來君の研究がこれを擴充されて行つたことは容易に推測できます。勿論君の研究は獨りこれに止らず廣く一般日本佛教史の上に及んでおりましたことは發表の論文によつても分ります。

そして最近淨土宗の宗團としての發達の研究に力を盡されてゐたやうであります。しかし、それも今はすべて空しくなつてしまひましたことは返す／＼も残念の至りであります。

君は闊達でありました。明朗でありました。よく他の言を容れましたが、しかしまた主張を曲げない自信の持主でもありました。自由自在といふ言葉がありますが、行くとして可ならざるなき君の才能は獨り大正大學ばかりでなく淨土宗としても貴重なものであつたに相違ありません。四十といへば人生の半以上を過ぎてゐると申さねばなりません。君の仕事の上からいへば、なほ若年であると申すべきであります。仕事の半分をもなさないで、いやそれが緒についたばかりで、この不慮の不幸に会しましたことは慨いて餘りあることでもあります。

敢て蕪辭を呈して謹んで哀悼の意を致します。

私心のない人

佐藤賢順

永い生涯の間にはいろいろの事に遭遇するが、ほんとうに驚くことというものは、そう澤山あるものではない。所が藤田君の死んだのには實に驚いた。惜しくつて、くやしくつてたまらない。

藤田君は近頃、すっかり油がのつてきて、八面六臂以上の活躍をしていた。何をやらせても人以上に出来る人であつたし、頼まれれば放つて置けない人であつた。大學教授、名刺の住職、鴻の巣町の選挙管理委員長、雑誌編輯者、どの一つを取つてみても容易な仕事ではない。それを一手に引受けてやつていた。

最近では町長に推薦されて、実に皮肉なことに、災厄に遭つたあの晩に、町の有力者達はそんなことを知らず、藤田君を無投票で町長に推薦することに話が決つたのだそうである。二つの勢力が對立しているような場合、その調停を計るのには、なくてはならぬ存在であつた。

藤田君も氣持の上では長く迷つていたようである——彼の今までの経歴からいえば、一個の學究として、歴史學者として立つていくべきであるし、それに大いに魅力を感じていたが、一方、彼の血の

氣の多い、世の中の動きに鋭い勘を持つてゐる性格としては、書齋に蟄居して紙魚のような生活をしてゐるのには堪えられない。いづれを選ぶべきかについて、考えていたようである。

しかしそれは近頃、自然に落ちつく所へ落ちついてきた。はたが放つては置かなかつた。信頼できる人間というものは、そう多くはないので、周囲の者が、いつの間にか彼を指導者に立ててしまつた。

彼が他人から立てられるのは、彼の判斷が何事についても、早くて正しかつたため、そのことがやがて一種の指導性を持つようになったからである。正しい判斷は我欲がある時には生れない。私心の人の考えは、いろいろ尤もらしい理屈を捏ね上げるけれども、五、六分間も聞いていれば、どこに壺があるのか、すぐ見破られる。ところが藤田君の話には、自分の方へ取り込まうとするこの壺がない。それは彼が少しも私心がなかつたからである。であるから、物事を正しく見られたし、また正しい判斷を下せた。だから人が隨いてきた。おのずから彼の指導力が生れてきたのである。もう十年も生きていたら、随分世の中のために働いただろう。

彼は私よりも十年も後輩だが、面倒なことがあると、私は彼の考えを聞いた。曇りのない鏡にこちらの心を映してもらふような氣持であつた。人生にはときどき易者が必要になることがある。藤田君は私のために易者の役目を勤めてくれた。

この大切な相談相手を亡くしました。くどいようだが、残念で、残念でたまらない。

藤田寛雅君

眞野正順

藤田君の死は餘り突然だつたので、はつきりとした現實感にまだなつていない。信じられないような戸惑の感が、私を宙に浮かしている。しかし、すでにその盛大な葬儀も済み、君の最後の営みの一つ一つが、すべて滞りなく終つた今に思うと、何だか目の前に突然青樹の生木の幹が荒々しく引裂かれるのを見るような感じがするのだ。彼はまだ四十二歳だつたのである。

讀者も知られるように私は昭和二十三年六月この浄土の發行を再び引受けることを決意した。浄土は當時殆ど壊滅に瀕していた。讀者数は恐しく減少してしまつたし、又、肝心の財力もなく、手慣れた編輯者もない。そして私はと云へば、一年の過半は病床に過しておるのだ。

一體何を目當てに手をつけたらいいのか。私は見當もつかなくつた。殊に一番氣に懸つたのは誰が本氣になつてこの實務に當つてくれるかということであつた。之に應じてくれたのは外でもない、當時敎學院の出版關係を擔當していた藤田君もそれから竹中信常君の

二人だつた。そこで兩君を中心として、その他の古い同志達が力を合せて浄土再建に乗出す事となつた。兩君は、その後連日のように拙寺の本堂裏の壊れかかつた洋室に集つて鳩首凝議したり又、忙しく飛び廻つたりした。その結果は既に讀者諸君も御承知のようである。浄土は決して速かではないが徐々に、しかし堅實に立直つてきた。之は當時の内情よりすれば、全く奇蹟のようなものであつた。

しかし、かかる奇蹟もその犠牲なしには生起するわけではなかつた。この三年間藤田君はじめ浄土同人は全く獻身的に果てしなく勞力の提供を強いられた。しかもその報酬としては、びた一文出したくても出しようのない會の經營状態であつた。「奉仕」とは、よく云われる言葉であるが、短期ならともかく二年三年と間斷なく續けることは容易なものではない。しかも出版事業の常として毎月々々追われるように編集・印刷・販賣等の繁雜なる實務が後から後からつめかけてくるのだ。その勞苦はやつた者でなければ分らない。少し氣を許せば忽ち頽勢が見る見るあらわれてくるのだ。この勞苦に藤

田君は眞向から立ち向ひ責任を一身に引受けて奮闘してくれた。

勞苦はそれだけではない。もつと苦しいことは少數會員の雜誌の悲しさ、恐るべき財政逼迫が毎年必ず週期的に襲來して來るのだ。

藤田君は、或は淨土トラクトを作つたり、販賣に馳け廻つたり金融をさがしたり。そんな時には寺務も學務も投り出し之に没頭し切つたのである。ただ表面から見れば何んの苦もない平穩な様に見えるこの信仰雜誌も裏に廻れば、このような血みどろな努力が繰返し續けられて來たのである。君なくして淨土は決して今日に存續し得なかつたであらう。此点、どうか讀者諸君もよく了解して頂き度い。君の靈のために――

(今度の不慮の災厄の夜、最後まで藤田君が携えていた手提鞆の中には淨土の原稿がぎつしり詰つてゐるのが見出された。それが外ならぬこの六月號の前半を飾つてゐる諸家の原稿なのである。この一事が最もよく事態を語るであらう。君がその最後まで心を懸けていたものは、やはり淨土であつたのである)

この没我的な純眞な氣質はその狭氣に満ちた男性的風格と相待つて君の獨自の特長をなすものであるが――こんな事も思ひ出される――昨年の春まだ寒い一月の末だつた。私は突然京都から極く内密な訪客をうけ甚だ重要な相談を持ちこまれた。それは當時すでに永年に渉る困つた事件になつてゐる淨土宗の東西分裂についてであつて、當時ではすでに調停のあらゆる手段が盡され、事件はいたずらに纏れに纏れ、どうにもこうにもならなくなつて仕舞つていたが、その

最後に残る唯一の和解手段として、今迄宗政の局外に立つていた學長等の手によつて兩派の主腦者を内密に會見せしめ虚心坦懷に互の心中を打開けて見たらと云うのであつた。私に素より異存のある筈はない。しかし氣に懸るのは、私の身體で、毎年やつとこさで冬を越してゐるやうな病體でこの嚴寒の中を、たださえ寒い京都に入つて果して任務が果せるかということであつた。然し躊躇つてゐる場合でないので勇を鼓して秘かに東海道夜行の人となつた。

その結果は、しかし、豫想したより遙かに良かつた。兩首腦者の話合は美しく纏り、さしもの難事件も、ここに覆水再び盆に歸る道がついたかの如くみえた。その談合の結果は佛教大學々長と私との連名の形を以て兩派に申入れをし、和平を實現の軌道に乗せようと云ふ事になり、私は勇んで歸京した。しかし身體の方はそうは云ふ事を聞いてくれなかつた、果然その翌朝からひどい發熱で忽ち就が上がらなくなつてしまつた。

これでは私の引受けてきた申入れ成文を作成することができない。私は困惑した。事件の性質上あくまで嚴秘に附さねばならぬので、めつたな人に頼むことはできない。思い惑つた末、遂に私は鴻の巢へ電話をかけさせた。藤田君ならばこの信頼に應じてくれると思つたからだ。

すぐ馳けつけて來てくれた君は私の枕邊で何遍も口述をとつては清書してくれた。しかし私は發熱してゐるので、どうもよく考がまとまらない。折角清書が出來ても氣に入らぬので破棄してまた新し

く口述をはじめ。しかし又駄目である、こんな事して三度ばかり繰返した後やつとまとまつた。出来て見ると極めて短い文章である。しかしあれほどさんざ繰返し直してみなければ、ここには到達出来なかつたのである。そこに佛大から江藤澄賢君が上京してきた。兩君とも私の家に詰めきつて、何枚も何枚も清書して、やつと各方面に發送した。

發表と共に反響共鳴は各所に上り事は半ば成就したかと見えた。しかしまだ時期は熟していなかつた故であらう。やがて事は遂に破れてしまつたのである。

病床に横つたまま私はこの経緯を靜かに眺めていた。心中は少しも悔ゆる所はなかつたが、只ただ一沫消しがたい淋しさは、此度の事の裏面に熱心に働き續けてくれた江藤・藤田兩君の努力がこのまま闇から闇へと消え去つてゆく事であつた。これが私には非常に残念であつた。しかし藤田君はすこし微笑されただけで、あとは全く忘れたやうにしていられた。

一諾之を守つて變らぬ信頼すべき人は屢存するが、それに伴う勞苦をも敢えていとわぬ人は少いものである。また勞苦を敢えてしてくれる人はあるが、その勞苦が隠れたまま葬り去られてもなほ淡々として意に介せぬ人は少いものである。藤田君はすでに人間が出来上りつつあつたように私には感ぜられる。

こういう風格は大正大學の中でも自ら君の姿をはつきりと周圍から浮出させていた——之も私の恥しい不徳の故であるが——昨年暮

學内に少し紛糾がおこり、その後學内整理などに纏んで、色々問題が生じたことがあつた。その間にあつて藤田君は解決の爲に、日夜肝膽を碎いた一人であるが、その間において私の感じた事は、藤田君は自らは強い主張を一面において堅持し乍ら、それを争ひのために争うという様な事がなく他面事件の潮流や捲き起る感情に壓迫される事を用意していつも事件をその全體に見渡し、その全體的調整解決へと秘かに心を配つていた事である。興奮しやすい紛糾の中では、之は仲々できない事である。この點君はすでに大人の風があつた。そして事件の間を奔走しながら、たえず正確な情報を求めて當時の責任者であつた私に提供し正しい解決に向ふようと苦慮された事は未だに忘れ難い感謝の種である。

君の家嚴はやはり功蹟深い宗門教育者であつて上宮・淑徳・芝などの校長を歴任された一種親しむべき風格を具えた悠揚たる長者であつたが、君もその氣稟を受けたのであらう一種の統御の能を生れながら備えていたと思われる。君はその鋭敏な感受性と實踐的才能の更に廣汎な點に於てむしろ親勝りとも評されていたが、この氣稟と風格が次第に生長して、やがて社會の蔭涼の大樹となることも遠くはなかつたと思ふ。

ことに近年は、種々な事件が起りその間に、色々な経験を積みまゐると共に、次第に、その風格が生長し成熟せられて來るのが、感ぜられたのであるが、思えば、實に残念な事をしたものである。

町のホープ消ゆ

馬場 秀夫

僕が行田市長に立候補したため鴻巣町では五月廿日町長選挙が行われる事に告示され、今度こそは全町一本の平和の姿でという輿論に應えて、町の有力者間で、町全體で藤田君を候補者に推すことに決まり、藤田君自身も既に決意を固めていた。『藤田君亡し』の知らせには驚き以外になかった。

この瞬間、町のホープを失う——と感じたが、その夜堀越・新井兩君と勝願寺にお悔みにいつた際兩君共ともく、『全く町の損失だ、今後に期待されたのに惜しい事をした』と語っていた程に、君の急逝は大きな損失だったのである。

僕が理事長をしている文化協會の理事として、鴻巣町を中心に北足立郡北部地方の文化運動に挺身されていたことは周知の事で、文

化協會の中に藤田君の存在は一段と光彩を放っていた。

僕が町長在職中、選舉管理委員長の外社會教育委員、公園運營委員等を兼ねられながら地方文化の向上、民度の昂揚につとめられ、君の博識と非凡の運營力とは、いくとして可ならざるはなく、忽ち他をひきつけて、中心的な人物となつて浮んで來た。ことに鴻巣町が埼玉縣下有数の『政争の町』という汚名をとつていただけに、清淨な君の存在は町民に『ホープ』として迎えられたのである。

だが、僕は僕なりに、君が東京での活動を知り、かつは年頃とはいえ年輩を考え、さらに大きな將來に望みをかけていたが故に、汚濁な實社會に、いま出て貰うことには躊躇していた。それ故に時には苦言も呈したもので

ある。

しかし僕の考えは言わず語らずの中に君によく通じ、何か起ると學理的に解決點を出しては胸におさめ、將來の參考にするという風であつた。

その反面、正しくない諸説に對しては高僧の風格をもつて『何萬人と雖も我れおそれず』の心境を披瀝して、じゅん／＼と説ききかすのであつた。學說—學理即現實とピッタリ結ばれているあたり君の風貌そのものだつたと言えよう。

彼と語り合うと、いつも『人間は話せばわかる』程度にならなければということになつたが、常識豊かな彼は、田舎の人をいつもやさしい言葉で説いて居られたが、側で聞いていると常識を一步も出ていないが、その中高邁な教えが流れていたのである。

つねに混濁の世相に清涼劑を投じていた君の急逝は、只に町の損失ばかりでなく、實に國家的な損失であつたと言う外はない。

『町のホープ消ゆ』と一時全町は燈が消えたように暗くなつたが、それだけで君が生前のありし姿がうかがはれるであらう。最後に君の冥福を祈り筆を擱く。(現行田市長、前衆議院議員、前鴻巣町長、鴻巣文化協會長)

二人の遺児

佐藤 密 雄

昨年の晩秋のこと、

藤田君の二女由佳ちゃん、突然發病して全身不隨になり、最初の診斷では極めて惡性で、或ひは時間の問題かも知れないとされた。此を報せて來た藤田君の速達の記事は、彼らしく簡にして要を得たものだつたが、流石に紙面には悲痛さが溢れて感じられ、最後には「亡妻眞百合の面影を多分に傳へて居る子だけに堪えがたい」とあつた。此一句は、私よりも恐らくは私の妻に呼びかけて居るものと考へられた。

私の妻は此速達を受取るほんの数日前、藤田君の二人娘の長唄と踊りの「おさちへ」會に出席して來たのであつたし、此日も、小学校の六年と四年の幼ない姉妹が、唄も三味線も踊も達者なのは、矢張り才女であつた母親の天分を受繼いで居るからであると話合つて居た折のことで、その姉妹の妹の方が突如重態になつたとの報せは全く私共を驚倒させたのである。

藤田君の亡妻眞百合さんは、私の妻より四つ程年下だつたが娘時

代を二人姉妹の如く送り、又藤田君と婚約が成立するや、當時京都に居た私共の所に來て約一ヶ月程滞在し、京都見物に娘生活の最後を過ごしつゝも、結婚への乙女の感情を訴えもし、未だ日の浅い私共の結婚生活の實際を見もしたのであつた。そんな關係で彼女の死後、私の妻は遺児である姉妹に特別な愛情を感じ、藤田君の後妻と言ふよりは、子供達の爲に第二の母を得べきであるか、或ひは健在の藤田君の母堂の孫教育に一任して、第二母を作らずに亡き母への美しき思出でを失はせぬ様にするべきであるか、いづれが良きかについて常に思ひ迷つて居たのである。

私には、昭和二十年二月四日の、特に寒い日で折悪しく空襲の烈しくなつた時に、藤田君に抱かれて死んだ眞百合さんの悲壯な臨終に行會はせた時の思出がある。そして此は藤田君にすれば、彼の生涯の中で最も悲壯で美しく且つ幸福を感じしめる思出になつて居ただらうと考へられるのである。藤田君は現實主義者で、甘い感情に溺れるやうなことの無い滅多にない人であつたが、たゞ亡妻についての思出だけは例外で、然も此は逆に常人以上に溺れた様である。

藤田夫人は凄美美人と言つた風の人でなく、すべての男に好かれと言ふタイプで、美しく温い人と言ふにふさわしかつた。夫思ひで、お産を控えて居ながらも、疎開せず、空襲下の四谷の夫の下に止まつて、當時學徒勤勞隊の指導に當つて居た藤田君を助けて家庭を護つて居たのである。そして、その過勞が流産となり、同時に急性ぜんそくと肺炎を併發して死んだのである。其頃貴重たつたベニシリンを藤田君が苦心して探し出して來たが其の効もなかつた。藤

田君と彼女の結婚は戀愛に依るものではなかつた。むしろ名門の間に有り勝ちな親同志の話し合ひに依る、政略的な結婚とも見らるゝものであつた。然し、外見は其の様に取り運ばれたのであつたが、後年藤田君の告白に依ると、彼女の才色を見込んだ彼が、彼女を求め男達を押のけて、奪取せんばかりの意氣組を内面にひそませて取結んだ縁組だつたと言ふのである。その様にして得たゞけあつて、彼女は佳人であり才分であり良妻であつた。本年二月四日に彼女の七回忌が行はれ、その夜に彼は私に對して、ありし日の妻を回想しつゝ、省みて至上の妻を持つた誇りを持つて居るとも言つた。従つて、藤田君に取つては、妻と呼ぶるゝものは亡妻一人であり、亦たそのことが彼の誇りでもあつたのである。若し、私共の要請を容れて彼が心ならずも再婚することがあつたとしても、再婚した相手は亡妻の影か或ひはたゞ妻としての業をなす者たるにすぎないものとなりかねなかつたのである。彼も人間であるから、そんなことは杞憂にすぎないとも思はれるのであるが、七回忌を過ぎても、再婚のことゝなると話をそらす彼であつたから、私には全くの杞憂だつたとも言ひ難いのである。

昨秋から暮へかけて私共をあわてさした由佳ちゃんゆかりちゃんの病氣はその後危期を脱し、今日では、數ヶ月もすれば全快すると考へられ、藤田君も療養の方法に心を碎きつゝも、近頃やゝ愁眉を開いた様に見えた。そして私共は、此の子供の病氣を轉機にして、藤田君や私達の思出や感情を第二義として、先づ第一に子供の爲めに、若い良き母を求めるべきであると言ふことに方針を決めた。そして、私も妻

も、此れは自分達の考への大進歩であると考へ、藤田君や關係者にこのことを唱え出したのであつたが、此は今から反省して見て遅過ぎた。

五月三日の災厄を知つた時には、未だ詳しい事情は何も知られなかつたが、私も妻も、彼が獨身であつたことが災厄の根本原因であるとした。勿論夫婦者だからとて崖から落ちないと定まつたわけではないが、藤田君の場合は、私共はその様なことにしたかつたのである。彼に再婚を強ひることが無理であつたとするならば、私の論法を以てすれば、彼の今度の災厄の原因は、彼の妻を奪い去つた、昭和二十年の空襲下の寒波である。いや戦争である。戦争の無理が未だに私共の週邊に尾を引いて居たのだとも思へた。

藤田君のことであるから、私共が無益に繰返す愚痴言などは笑ひ飛ばし、現世から念佛一番、大股で幽冥の境を越して極樂に入られたことゝ思ふ。そこで私共も元氣を取戻し、二人の遺兒達の生長を待ち、彼女達にありし日の藤田夫妻を語る迄、時を繰ぐことにしたい。

みたまに捧ぐ

須藤 隆仙

いつの日か 無常迅速と記したる

師ふみの書は常世琴とこよこ

音色悲しき

稿 遺

賽 錢 放 談

藤 田 寛 雅

日本の佛教の特色は、寺院建築や佛像や、學匠の述作や禪僧の語録などに求むべきではなくして、例へば民間の寺院や辻堂や、道ばたの石地藏やお彼岸まゐりや、お會式や三十三ヶ所めぐりや、さういふやうなところにおいて認めらるべきである。——というゝつだ・さうきち博士の言葉は、たしかに佛教史を考えるものにとつて大事なところを衝いていると思ふ。宗義宗派の發展とか、寺院僧侶の傳歴とかをいうことが佛教史の主題だというような考え方からはもう脱け出して、研究の視野も廣くなり、また研究の方向も分化されてきているが、このつだ氏の言葉にすぐ應じられる程には至つていない、むしろまだこうした面は見残されているというのが實際ではなからうか。その點では、民俗學の人たちに却て優れた研究が行われてきていると私は考えている。

多數の參詣者で賑わつている、例へば淺草の觀音とか、

成田の不動に群參する人たちのどれだけが、淺草寺が天臺宗で、成田山新勝寺が眞言宗智山派だということを知り、またそれに關心をもつているだろうか。寺の傍から言えばそれぞれの屬する宗派、從つてその據つて立つ教義、教義から必然とられる法儀行事、そうしたことは大事なことであり、否むしろそれこそ中心的なものではあるが、群參する。一般民衆の側から言えば、そうしたものはまた別の面から、その寺に結びつき參詣しているとも言えるものがある様に思われる。淺草や成田はいわば參詣寺であるが、檀家寺といわれる中小寺院にしても、多くの檀家が、それぞれの菩提寺の宗派を知り、その宗義信仰に、どれだけ結ばれているだろうか。あるいは極端な言い方で、佛教々團の側からは頭から否定されるかも知れないが、佛教と民衆との結びつきというものは、歴史も古く、それだけに深いものもあるが、その結合點、接觸線を成しているものゝ中

には、教理思想といった佛教の内核から一直線的にひき出してきて解き明すには困難なものが、相當多いと思われる。佛教史も、我々の日常性的な周圍から、とげぬき地藏とか何とかエンマだとか、或いは百度詣りや盆、彼岸などの在り方を考えることから解きほぐしてゆくことが必要になつてきていると思う。考えれば問題は我々の周圍に澤山まだ見残されている。

◇

誰もが現在でも經驗をもつているお賽錢、社寺に參詣してボンと賽錢箱に放り込んでゆくあのお賽錢を、特に問題としてとりあげて強調されたのは、私の知る所では柳田國男氏あたりが初めてであろう。——神社制度の研究者たち

追悼

佐藤 治子

五月雨るゝ夕に悲しき電話さく

追憶の話つゞきぬ遠蛙

芍薬の咲きそめにけり御佛に

にとつて、御賽錢箱がいつの頃、又いかなる必要に基いて始まつたかといふことが見残されている。是れは全く風俗的な事柄には違いないが、之を明白にした上でないと、日本の祭の變遷の最も大きなものを考えてみる事が出来ない。——と氏は「日本の祭」の中で指摘されているが、このことは佛教史の研究者たちにふりかえてもあてはまることである。

さい錢は、中世には殆ど散錢と書かれているが、之は古く散米、散供などと呼ばれ——今でも地方の寺社に時たまみられる米を包んだオヒネリなどはその名残りであるが——古代民俗の稻米儀禮が、貨幣經濟の進みの中で轉化して散錢となつて來たのであると一應考えられる。そして「散米を受ける箱はむしろ散錢櫃とよばれて置かれるようになった。鶴岡八幡宮でさえそれは中世末期に漸く行われたにすぎない」とは和歌森太郎氏（日本民俗學概説）の言葉であるが、散米を受ける箱が散錢箱の前身として諸處の社に置かれたのか、どうか。氏は一つの史料を擧げている。それは快元僧都記元文九年四月十六日條であるが、鶴岡八幡宮の神主が「往古より當社に此事なし、神は非禮をうけたまはず、義然るべからざると」注意されたにも係わらず、神前に散錢箱を設けたため病氣になつたという話である。この史料では鶴岡あたりで散錢箱が天文の頃に問題になつていたことは分るが私はも一つのことに心を惹かれる。「神

は非禮をうけず」として斥けたのは、散錢箱なのであらうか。この記事では勿論その様にうけとれるが、若し他の社でゞも「散米を受ける箱」がおかれていたとして、散米箱も非禮とされたのだろうか。史料の上からそうしたこと、いま適確には言えないが問題は箱の設置そのものもそうだが、更にその裏にあるような氣がする。

適と引用された快元僧都記を改めてもう少し讀んでみると散錢のことがいろ／＼出てくる。この問題の時よりも前天文元年六月一日の條に、「神興三基、拜殿に傍り安置し奉る處、諸人參り、散錢二三千疋計り有り廿一日迄置き申す」と見えているが、この期間内全體の散錢は相當な額があつたろう。とにかく當時はすでに、寺社に於て何か格別のことがあれば參詣者の散錢高は上昇したであらうから、神主が散錢箱を常置しようとしたのも無理のないところである。ところが之は圓覺寺のことであるが、その洪鐘——現在國寶で有名な鐘だと思ふが——に「六十一年前の如く貴賤參詣し」、一日の中に、散錢は四十四貫文に上つたという。之は六十一年目というから特に開帳の様な行事で貴賤の無縁參詣であつたのだと思うが、その影響で鶴岡の方も「群集不斜」賑あう有様であつた。神主が散錢箱を設けようとしたのはこのことがあつて間もなくのことなので、——記事では鐘の開帳（？）がまだ行われている期間中の様にも思へる。この時は圓覺寺の鐘の散錢萬匹を、鶴岡造營の費に寄

せる豫定であつたが、神主の病惱、その他一、二の不祥によつて中止し、散錢は全て寺家に任せたとある。するとこゝでは造營費に寄進される筈の圓覺寺の散錢までが忌避されてゐるわけで（この記事は前記六月十六日の同日條）散錢箱の設置も神への非禮だが、散錢の受用も問題のように感じられる。

もう五十年餘り溯つたところに、散錢に對する一つのはつきりした考え方のあることを示しておこう。室町時代の佛教界で、眞宗の蓮如と殆ど時を同じくした、天臺系の淨土教人で、坂本西教寺を中心とする教化活動にひろく衆庶の歸信をあつめていた眞盛が、「伽藍興立並びに衆僧法度の事」の中で、次の様な一條をたてゝいる。（傍點筆者）

一、佛供灯油に於ては別して志の人の之を送るは受用すべし、無縁參詣の人の散錢を用ふべからざる事

之はまことに散錢に對する注意をひく考え方である。「無縁參詣の人の散錢」という言葉が現わすものは何であらうか。行持の嚴正な、當時の信仰界の中心人物である眞盛がこのような制禁をかゝげたところに、われわれは當時、このような「散錢」が多く集まり、また従つてそれだけに之を受用することの多かつたことが知られるのである。

こゝに參詣の性格が考えられる。

（本稿は故人が文部省科學研究費補助による研究の一端を淨土のために書き改めたものであるが未定稿に終つたことは誠に残念である。）

本誌の役割は年を追うて重大である。單なる啓蒙だとか、法語、經典の傳統的手ほどの刷物に終止すべきではない。著者も讀者も一生懸命に、教を生かす場である。

教は、所謂學問と異つて、その時、その場所に於て、人が生かされるものでなければならぬ。時と人とを無視して、千年一日の如く教を守り續ける時、やがては、教はミイラになつてゐるのを發見するであらう。釋尊は相手によつて説き方を考えられた。インド・中國・日本と祖師等によつて、人との接觸が持たれ、いはば、ヴィヴィッドのものとして現在している。餘りにも浸みわたり、今日それが佛教思想であることすら氣づかれぬほど我が國民の間では生きている。之は、一に、時と人との接觸面によつて、教が生きたからである。學問的にもかかる

面は可能であるが、本質的であるとともに抽象的である。

この點では、現實の社會世相には單に論ずるだけで、現實社會は複雑であり、雲を把むような話では間尺に合はぬことの分が多い。教を空論にしないためには、明日の心をより所を求めるものと與えるものとの間に、ごまかしのない心のやりとりと言葉がある。しかも宗教の場合には與えるものは、同時に自らも求めるものである時が多い。與えることによつて、又、自ら得るものである。このようにして偽善的でない問答が世を縫うて續けられていくに伴つて教も生きていく。衣も纏とうと纏わざるとによらず、尊い文章が残されていく。一子を失つた時、どうにもならなくなつた時、失望、戦、矛盾等々に一それらが整うて文字にされる意味で、本誌は生きる教の有力なあり場處である。(R)

維持會員募集

近來未曾有の出版バニックにも拘らず、本誌が順調に進み得るのは偏えに會友皆様の御支援に寄るところでありますが、情況は益々切迫して参ります。由つて本誌もこれが對策として恒久的經營合理代を計るべく、色々協議仕り、左の如くに維持會員を募集致すことと相成りました。故、何卒奮つて御申込み下さいますよう御願ひ申し上げます。

一、維持會員 五百名

一、維持會費 一ヶ年金五百圓

一、特典 本會發行の諸印刷物は發行毎に一部

宛御寄贈申します。又色々の御依頼には優先的に御奉仕致します。

一、申込方法

葉書に維持會員申込みとして、住所氏名明記してお出し下されば、會費清算の上御通知致します。

以上

光を掲げた人々

旭 海 邊 渡

(一)

作・歳光 切知

(NHK放送台本)

M(音楽) テーマ(主題曲)

ア ナ 光を掲げた人々。

M テーマ

ア ナ 毎週日曜日のこの時間には、誠實な心と、深い愛情とをもつて、その一生を貫き、人間の幸福に、数々の貢献をした人々の姿を、お傳へ致します。

これらの人々は、世俗の成功を求めず、報いられることを

明待せず、ひたすら自分の信ずる道を生きました。

ある人は有名になり、ある人は不遇のうちに一生を終りましたが、これらの人々の氣高い生涯は、私共の心に絶えることのない勇氣と、希望の灯を點するものであります。

M コーラス上る。

ア ナ 知切光歳作、新らしい時代の聖者、渡邊海旭。

M テーマ

「S・E (擬音効果) 教會の鐘の音」

語り手 明治三十九年十二月七日の夜のことです。

ドイツのライン河のほとりの、さゝやかな店で、特別誂らへ、スキ焼き鍋をつまきながら、しきりにビールを呑んでゐる、日本留學生の一團がありました。

「S・E 喧噪」

學生一 おい、渡邊！ もつとビールを呑め、ビールを、最前から貴公一人で。牛肉ばかり、つまいてるぢアないか。

海旭 いや、僕はもう酔つたよ。——それより久しぶりの、スキ焼きが、とてもうまいよ。

學生一 何だと？ 坊主のくせに、貴公、牛肉がうまいくつて、肉食妻帯は、出家の固く禁するところぢやないか。

海旭 そんな昔のタブーに、こだわることはないだらう。

好きだから呑む。好きだから食ふ……第一菜ツ葉ばかり食つたんぢア、人間の頭に健全な思想は宿りツこないからな

……。

學生二 おや、ドイツくんだりまでやつてきて、坊主に肉食の講
釋を承はらうとは思はなかつたよ。

海 旭 おい、今一句浮んだから、披露するぜ。

學生一 同 うん、披露々々。

海 旭 出山の如來にビール捧げばや。

學生一 出山の如來にビール捧げばや——、おい、お釋迦様に
ビールを献じようといふのか。こいつ益々しやれたことを
言ふぜ。

學生二 なるほど、今日は十二月七日、釋尊の悟りを開かれた晩だ
な。

海 旭 うん、成道會なんだ。

學生二 なるほど、それで君は、我々にスキ焼きとビールを奢つた
のか？

海 旭 如來にビール捧げばや。釋尊だつて當時ビールがあれば飼
料臭い娘の牛乳なんかよりビールの方を呑まれたにちがい
ないよ。(笑ふ)

學生一 ようし俺も如來、ビールをさゝげるぞ。

學生二 よし、みんなお釋迦さんのために乾杯。

學生一 ちえすと……。

「S・E 一同が、如來バンザイなど、唱へながら乾杯する」

海 旭 愉快だね。今夜は全く愉快だね、どうだい諸君、これから
オペラを聞きに行かうぢやないか。

ベートベンとスコットランドの民謡が素晴らしいさうだ。

學生二 うん、行きたいが、切符が手に入るまい。素晴らしい評判
で、切符は遠の昔に賣り切れて、一枚百マルク以上のプレ
ミヤムつきだつてぢやないか。

海 旭 いや、そんな評判だつたので、手を廻して、今晚の人数だ
け、切符が買つてあるんだ。

學生二 ほう、そりや素晴らしい。

學生一 よし行かう。出山の如來にオペラ聞かせばや(一同の笑ひ)
「S・E 立ち去る足音」

學生二 (やゝオフ(間をおいて))おい渡邊、ベートベンと、お経よ
むのとどつちが藝術的感銘が深いと思ふか。

海 旭 (オフ)おい、つまらんこと言ふな、お経はお経、ベ
ートベンにはベートベンさ……。

M ブリッジ(はしわたしの曲)

語り手 明治四十三年三月、ドクトル、フィロソフイーの學位を獲
得して、ドイツから歸つた渡邊海旭を、深川の西光寺に訪
づれた「新佛教」の同人たちは、出て來た住職の姿に、ま
ず、あつと驚ろかされました。

「一體、どうしたんだ、その姿は？」

「何か變つた所があるかね？」

「だつて君、それがドクトルフィロソフイー渡邊海旭の姿
かね？」

十二年間に渡る、西洋の生活で、すっかり洋風化した、ハ
イカラ姿と思ひの外頭をツル／＼に剃りあげた、袈裟、衣
の純然たる出家姿の渡邊海旭に友人たちはまず度膽をぬか
れました。

友人 實はね渡邊君、今日やつてきたのは外でもない、君ももう
三十九歳だ。おまけに洋行までしてきて、すっかり新らし
い知識を身につけて來た君に、今更議論を吹きかけてみた
處で仕方がない。一體君は結婚をする氣が、あるのかない
のか、どつちだね？。

海旭 さア、そうそう開き直られても困るが、僕には妻子を養ふ
資格が無いよ。

友人 資格で言ふんぢアない。第一こんなに居候を抱へこんだ大
家族に、女手がなしでは、不便で仕方がないだらう。

海旭 その一面また、呑氣な所もあるよ。

友人 とにかく妻といふものは、生涯娶らずにゐる譯にも行かな
いもんだからね。

海旭 普通の人間ならね。

友人 普通の人間？

海旭 僕は佛の弟子なんだ。

友人 しかし君、昔と今とは違ふよ、第一病氣でもした時は、誰
に面倒見て貰ふんだね？

海旭 昔の出家には、醫者もなければ、看病人もない、それでや
つぱり普通の人間より長壽を保つてゐる。

友人 君はしかし、昔流の戒律主義で、佛教の興隆を圖らうとし
てゐる譯ぢアないだらうね。

海旭 そそそんなことはないよ。唯、昔も今も出家には出家たる
律儀は、あるべきだ。

友人 おどろいたな、君は洋行して來て却てコチ／＼の戒律主義
者になつたようだね。

海旭 とにかく僕は、出家である限りは、一生結婚しないつもり
だ。

M ブリッジ

A ナ 海旭とは、こんな人物でありました。

生れたのは明治五年、東京淺草、本屋の店員などをつとめ
ながら、十四歳の時に佛門に入り、佛敎學を修め二十七歳
の時には淨土宗門の第一回の留學生に選ばれて、獨逸に渡
つたほどの秀才でありました。

獨逸では梵語、西藏語、バーリ語等を修めて、比較宗敎學
を研究し、全く新らしい境地に立つ、佛敎學者として、そ
の歸朝は、内外の佛敎徒に非常な期待を以て迎へられたの
でありました。

やがてこの世界的佛敎學者のもとへは、世界各國の佛敎徒
が集まつて、獨逸のニヤナチロカ、バツボーニ氏の如きは
八年間も、その會下に參じ、その他、英國、中國、インド、
ロシヤ、フランス各國の佛敎學徒が、日本を訪づれて、ま

づ足を向けるのは深川の海旭のもとでありました。

チロカ博士 (なまりのある日本語) 渡邊先生、今日は不思議な人を紹介します。

海旭 ドクトルニヤナ、チロカ、そちらの婦人は何者です？

チロカ この人、私と同國の貴婦人、エルゼブツフォルツさんです

エルゼ (何か口の中で言ふ)

海旭 わたくし渡邊です。

エルゼ (きょとれぬドイツ語)

チロカ 渡邊先生！ エルゼブツフォルツさんは、あなたのお弟子さんにして貰ひたいといつて、はるくドイツから、來られました。

海旭 お弟子に？ 冗談ではありません。

チロカ はい冗談ではありません、エルゼさんは、よくくの本氣です。

海旭 私にはそんな資格はありません。

チロカ 資格ではないです。先生の人格です。學識です。

海旭 困りましたな。

チロカ エルゼさんは、法をおさめるまでは三年でも五年でも、外のお弟子さんたちと一緒に、先生のお膝元で、修業する覺悟で海を渡つて來ました。

海旭 それは困る。

チロカ 困らない。

海旭 チロカ博士、西光寺に女の人を置かないことは、博士もよ

く御承知のはずです。

チロカ 承知です。しかしエルゼさんは、女子と言つても、外國人です。

海旭 どこの國の人でも、女は困る。

チロカ それでは先生、先生の佛法は、女人は濟度せん掟ですか。

海旭 そんなことは斷じてありません。

チロカ それでは何故、女にかぎり、毛嫌ひされるのですか？

海旭 困つたな、そそそれはつまり、私の嗜好の問題です。

チロカ 嗜好？ 好き嫌ひありますね、渡邊先生の佛法には好き嫌ひありますか？……佛さまには好き嫌ひありませんね。

エルゼ (泣聲)

海旭 そそそんなこと言はれても、困るな、まつたく參つたな、

チロカ 困らないでせう？

M ブリッジ

語り手 さすがの海旭先生も、女人を近づけるか、近づけぬかといふ問題では、友人、知己たちの、善意のおせつかいに、度々惱まされたようです。しかし當りの柔らかなくせに、内心は鐵のように堅い信念の人、海旭は遂に、一生女を近づけることなしにすごした、近代稀に見る僧侶らしい僧侶でありました。そのくせ、後輩たちの結婚の媒酌をすることが何より好きで一生の間に、媒酌した數は、實に百組に餘つたと言はれてをります。

M
ブリッジ

弟子 (讀む)新春重喜瑞盈堂 犀繡鴛鴦玉燭光 佳客錦筵歡溢處

梅花紅白交枝香 有難うございました。

海 旭 いや、本當にお目出度う。

弟子 先生！ しかし私は本當を言へば何だか先生にすまないような愧づかしいような割り切れない氣がしてなりません。

海 旭 どうしてだね？

弟子 先生私は本當に、結婚しても、よい身分でせうか？

海 旭 どうしてそんなことを言ふのかね？

弟子 だつて、先生は——。

海 旭 君、僕のことを引き合ひに出すのは勘辨してくれたまへ、

僕は只、自分の好きで獨身を通したんだから……。

弟子 でも。

海 旭 人間といふものは結婚しないといけないね。

殊に結婚するなら、君のように若いうちだね。——つまり

結婚によつて、もろくの障礙を解消して健全な生活を営むことができるのだからね。

弟子 はい。

海 旭 とうとう僕も、君達で、百組の媒酌をしたことになつて、

愉快だね。

弟子 先生は我々、弟子たちの媒酌をして下さる度ごとに、今日のように、詩を一篇づつ、はなむけして下さいますね。

弟子 それから玉置君のにも 交枝芳苑雙松茂と、ほれ、枝を交へとあるでせう？

外の友人のにも、結婚のお祝の詩にはみんなこの枝を交へ

があるんです。

海 旭 おや、僕は氣がつかかなかつたが、君は又、妙な發見をしたもんだね。

弟子 梅花紅白交枝香——先生が、私たちの結婚を、そんなに淨らかなものに、見てゐて下さると思ふと、僕はもう、それだけで勿體なくて心強くてうれしくて……。 (せきあげてくる)

海 旭 そんなこともあるまい。

弟子 でも、黒田君の時にも、玉置君の時にも、いたゞいてゐますよ。

海 旭 さうだつたかね。

弟子 ところが面白いんです。實は僕のをいただいた時、すぐ氣がついたんですが、黒田君のは、外の處は忘れましたが、結びの句が、梅花紅白交枝香です。

海 旭 梅花紅白交枝香ね。おや！

弟子 ほれ、僕がいたゞいたのも、梅花紅白交枝香でせう？

海 旭 なるほど……。

海 旭 おい、君、何だい君、そんなこと、あたり前ぢやないか、しかし、妙な發見をしたもんだね。

梅花紅白交枝香 枝を交へ……ね、實際だね。枝を交へか、なるほど……。

(次號完結)

本稿は本年二月放送されたもので、これを掲げ得たことは、原作者並びに版權所有のNHKの好意によるものであり、その交渉に當られたのは増谷文雄氏である。ここに記して御禮に代える。

芝園だより

○人にはそれぞれの面で、或は遠く、或は近く、親疏が感じられる場合があるが、少くとも私個人にとつて、藤田兄は兄貴の如くに親しみ深く、離れられぬ存在となっていた。

それが不意に、何の豫告もなしに、再び手の届かぬ遠い處へ飛び去つて行つてしまつたのだから、驚きや悲しみといった、人並みの感情が湧く前に、どうして黙つて逝つてしまつたのだろうかといったいい知れぬ愚痴が先になつてしまふ。

今、すでにむくろと化したその遺體を前に合掌しつつも、人目さえなくば、手をかけて揺り動かしてその眠りを覺ましたい衝動にさえかられたものだつた。

だが、時が経ち、氣も落ちついで來た今日此頃、もう愚痴もいまい。悲しみも拭おう。この上は、せめて、氏がこよなく愛し、それ

故にまたその貴い生命の綱をも細めてまで、守りつゞけて來て下された本誌を、懸命に支えて行くことが、氏に對して、今までのむくいを獻ずることにもなるし、時こそ遅れたれ、いずれは我身にもめぐり來る同じさだめに對する覺悟にもなると、自らにもいい、同人諸士並びに弘く讀者諸賢にも倍舊の支援をお願いして、憤んで懷運社寛雅和尚の冥福を祈るのである。

(竹中)

○「自分で場を開いていくんだよ」と藤田氏は自己を語り、私を勵ました。それは、あの悲しむべき日の前日、編集室でのことであつた。喰いつくようにして目的に突進するファイトがそこに見られた。現實から逃避せず、世間の中に力強く又溫容なる自己を主張し活動された。孤高を守るもいゝが、現在宗門はこの「虚假」の世間の中に挺身する人が少いのは淋しい。氏が、ひよつこりと又、編集室のドアを開いて「どうだね」と來られ

る氣がする。「淨土」を愛兒のように可愛がられたのである。永遠に去られることはないのだ。

○私は今後、更に積極的に編集面を手傳うこととなつた。藤田氏の居られなくなつた分を、努力と若さによつて満したいと思う。

○會員は地味ではありますが、じり／＼と増えて來ており心強く思ひます。特に寺院方による紹介が目立ちます。本誌が法を傳える良き器としての利用が此上とも望ましいことです。それだけに種々の御希望を知りたい。

○トラクト廣告の値段が、宗報、淨土宗新聞、本誌豫告等種々喰違つて恐縮でした。表紙の通りです。

○讀者諸氏からの便りが少し淋しくなつた。本誌發行が、今年に入つて紙等の事情で月半ばを過ぎて出るといふ事情も原因であらう。

だが、茲二三ヶ月で、急速に取り返えず見込です。

○本月二十一日が藤田氏満中陰に

當るので、これに間に合わせるために、はからずも發行期日もいさゝかくり上がり、次號よりは定期に復し得ることと思われまふ。次號はお盆施本用に御利用願えるよう編集致しました。(前出)

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年五月廿五日印刷
昭和廿六年六月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 東京都千代田區神田保町
共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

振替 東京 八二一八七番
會費番號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共

大正大學教授

佐藤賢順著

信仰への導き

B五半截 十六頁
一部 七圓

近來ラヂオに講演に縦横の活動をつゞけられる著者が想を練り、思いを新たにして、信仰の眞實なる姿と之れに至る道を平易簡明に説き明かした絶好の信仰入門書。

藤井實應著

一枚起請文

B五半截 十六頁
一部 七圓

浄土宗布教の第一線に活躍されている筆者が、特に本會のために、宗祖信仰の實質を從來の型を脱して新しい思想と深い信仰の上から、懇切に指し示めされた、念佛信仰者必讀の小冊子。

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

大正大學教授

佐藤密雄著

お盆とぜがき

B五半截 八頁
一部 四圓

現在佛教の生きた習俗として重要な意味を持つお盆と施餓鬼の意義と行事を、一般知識人のため、筆者の印度佛敎學の造詣を駆使して書き下ろした快心の作。

お盆を間近に控え、敎勢擴張、法城護持の紙の彈丸として、右三著を充分に御利用下さるようお願い申し上げます。

送料九部以下六圓十部以上十二圓、十部増毎に六圓増

但し五十部以上三十三圓、百部以上本會負擔

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番